

熊本地震から10年。 社民党が問う「命を守る」真の優先順位

橋村りか副代表が益城で訴えた、現場主義の災害・平和政策

2026年4月16日、熊本地震の本震から10年。社民党熊本県連合副代表の橋村りかは、自らも激震に見舞われた益城町の街頭で、自らの体験を通じ「国の在り方」を問い直す提起を行いました。

■ 100キロのベッドが動いた夜 ——「自助」の限界を知るからこそ

橋村が語ったのは、障害を持つ娘さんを抱え、文字通り「死」を覚悟した夜の記憶です。100キロもの介護用ベッドが家の中を激しく動き、家族で必死に支え続けた極限状態。九死に一生を得た橋村を支えたのは、駆けつけた救急隊や、食料を分け合い「生きていてくれてありがとう」と声を掛け合った地域の絆でした。「道路が広くなり、建物が新しくなれば復興なのか。そうではない。大切な土地を離れざるを得なかった痛みや、今も地震アラームに怯える子供たちの心のケアこそ、政治が下支えすべき『復興』の土台です」

■ 社民党の「人間中心」の災害対策

橋村が学童保育の現場で目にするのは、震災を知らない世代の子供たちです。彼らに「大人があなたたちの命を必ず守る」と約束できる社会をどう作るか。社民党熊本は、以下の視点を政策の柱として掲げます。

1. 「ハコモノ」から「ケア」への投資シフト：
大規模インフラ整備だけでなく、避難所環境の改善（医療的ケア児や高齢者への対応）や、被災者の心の傷に寄り添う継続的な相談体制の確立を優先します。

2. 誰一人取り残さない地域防災：

「怖い」という感情を生存への力に変え、地域の誰もが孤立しない「顔の見える」防災ネットワークを再構築します。

■ 「平和」は足元の暮らしから始まる

演説の終盤、橋村は強い口調で現政権の姿勢に疑問を呈しました。「私たちが負担している税金は、被災地の復興や、お互いを支え合うためにあるはず。それを、人の命を奪うための武器や戦争の準備に、国会の決議も経ず勝手に使っていく。これを許していいのでしょうか」社民党が考える「平和」とは、単に戦争がない状態ではありません。「災害が起きて、病気になる、安心して明日を迎えられる暮らし」があること。橋村は、日々の生活の中にある不安を取り除くことこそが、真の安全保障であると断言します。

■ 若い世代・子育て世代の皆さんへ

「小さな声だから、上げて無駄だと思っていました。でも、その声こそが政治を動かす原動力だと、今は確信しています」

橋村りかは、毎週木曜日の街頭挨拶を通じ、皆さんの「日常の不安」を政策へと繋げる活動を続けています。

4月16日の青空を、子供たちの世代にも繋いでいくために。社民党は「命が最優先される政治」を、ここ熊本の足元から作り直していきます。

社会新報熊本県版のバックナンバーは下記のアドレス、
右の二次元コードからご覧いただけます

https://drive.google.com/file/d/1imqtoZT6gVr-xe6D0_zK7hwPN8N1KGBK/view?usp=sharing

